

## 幼児期の自発的行動に関する研究 9

—— 「人へ向かう行動」をめぐる保育の問題 ——

阿部 和子 ( 聖徳大学 短期大学部 )

### I. はじめに

本研究は、保育における基本的な課題である子どもの発達を「自発性一人へ向かう力」に焦点を当てて理解しようとするものである。1990年から1996年にかけては、0歳から6歳までの「自発性一人へ向かう力」、特に子ども同士の関わりに着目して、その発達の具体的な姿を明らかにすると共に、その関わりを通して育つものについて検討した。

そこで、この研究の一応のまとめとして、「人へ向かう行動」が社会化される過程における保育の問題を検討することとし、これについて今回は3歳未満のものを整理した。今回は昨年に続いて3歳児クラスにおける「人へ向かう行動」をめぐる保育の問題を検討するものである。

### II. 方法

方法は、前回同様に、これまでの「自発性」について発表したもののうち、以下の3つを比較考察するものである。

- (1) 本研究の先行研究である「幼児の自発的行動に関する研究」IからVIIの中でまとめられた「自発性についての一応の定義」(日本保育学会第37回大会発表1984)
- (2) (1)を続けているうちに、保育者が自発性をどのように捉えているのかを検討する必要が出てきたので、それについて検討したものである「幼児の自発性の心象」(日本教育心理学会第29回総会発表1987\*)
- (3) (1)に上げた先行研究IからVIIで整理された課題について1990年からこれまで「幼児期の自発的行動に関する研究」1から7として検討してきた。その中の5で発表されたもの(日本保育学会第37回大会発表1994\*\*)

(\*)東京都23区の公立保育園の2840名の保育者を対象に「子どもの自発的行動について具体的な思い起こされる姿」の自由記述されたものをエピソード分析し、整理された「自発性の心象」

(\*\*)1994年発表分の対象は3歳5か月から4歳6か月の子どものエピソード289である。

### III. 考察

#### 1 自発性の一応の定義 (1984 発表分抜粋)

- (1) 自発性は子どものしようとする行動特徴で表現

され、幼児期の自発性は「要求固執」という形をとりやすい。

- (2) 自発性をどう考えるかを含めた周囲とのやりとりを通して自発性は方向づけられ発達する。幼児期の自発性は「人のものを取ろうとする」ことも含まれる性格とみた場合、それは意図的な関わりの中で、発達期待として方向づけられる性質を持つ。
- (3) 発達初期の自発性は、原始的なエネルギーのようなものであり、何にでも「向かっていく力」である。それは「ものに向かう力」「人に向かう力」「自分に向かう力」として表現される。
- (4) 自発性は社会化されるとみべきであり、徐々に人との関わりの中に組み込まれ、ものに向かう、人に向かう、自分に向かう力として社会化されていく。

#### 2 保育者の「幼児の自発性の心象」(1987)

ここでは保育者の3歳児の自発性の心象から、子ども同士のかかわりに関連する部分を抜粋する。

- (1) 保育者の手を離れて子ども同士で遊べる。
- (2) みんなで一緒に遊びたい(子ども同士で援助したりされたりする。やりたいことを我慢して別の役を引き受ける)。
- (3) 子どもたち同士のかかわりの深まり(病気の他児への気遣い、他児のあるべき姿を注意して、自分でもそのように行動する。もめごとをおさめる役割がとれる)。
- (4) 遊びの発見(遊びの新しいやり方やそのバリエーション、ただ作るだけでなくそれで遊ぶ。工夫、わざの向上、知恵を出しあって遊びを続ける)。

#### 3 「3歳児クラスの子どもの関わり」の姿

1994年に発表されたものから「子ども同士の関係を再度、整理したものが「3歳児の子どもの関わり」である。(当日、資料にて配布)

#### 4 自発性をめぐる保育の問題

- (1) 「一緒に遊ぶこと」をめぐる

上述の2-(1)によると、保育者は3歳児の子どもの関わりにおける自発性を「子どもたち同士で一緒に遊ぶ」ことにもっている。本研究においては、1994年に考察したように3歳児期は「行為する主体」として自己の輪郭が閉じ、自他がお互いに閉じた

もの同士として区別され、その間にまたその間を切り結ぶルールに向かう。つまり、相手の内側（相手の遊び）に入るためには「いれてーいいよ（だめよ）」という手続きが必要になる。相手の「だめよ」にあった場合、それでもそこに参加するためには、その拒否を超えて相手と折り合いをつけなければならない。それには相手が興味引かれる遊びの展開の提示が必要になる（当日資料参照）。であるから保育者が、上述の2-（2）に上げている「みんな一緒に遊ぶために助け合ったり我慢する姿」は、一緒に遊ぶことが楽しいという経験を十分に重ねた後に、さらに、子どもたち自身の中に、その遊びを持続させたい欲求が出てきたときの姿であると考えられる。「子ども同士で遊ぶ」ことそのことや、先に「助け合うことや我慢すること」を急ぐのではなく、むしろ保育者が自発性の心象として上げている2-（4）遊びの発見で上げられている、遊びの新しいやり方やそのバリエーション、作ったもので遊ぶ、工夫、技の向上など保育者も一緒になって楽しく遊び続けることが重要であることを確認したいと考える。さらに、この時期の「一緒に遊ぶ」ということは、大方は、その遊びが終わるとその関係も途切れてしまいやすい。しかし、一緒に遊んで楽しさを十分に満喫した子どもは、その楽しさを持続させたいということから「今日（給食の時）一緒に座ろう」というように、楽しさを共有した相手との関係も持続させようとすると考えられる。楽しい遊びを十分に遊びこむことを重ね、「一緒に座ったり」「一緒に寝たり（ひるね）」も同時に重ねながら、いつも一緒にいる「なかよしの関係」に発展していくと考えられる。そして、このなかよしの関係が核になり「わたしたち」という仲間関係へ発展していくと考えれば（1994年に考察）、最初から子ども同士で遊ぶように働きかけるのではなく「保育者も一緒に遊ぶ」など楽しい遊びを普段にたくさんすることが、子どもたち同士の関係の発展や深まりには重要である。

#### （2）同質質の経験から異質の経験へのひろがり

相手の遊びに参加しようとして、「いれてーだめよ」のやりとりのあと「これ（そこで遊んでいる子が使っているシャベルなど）がないとだめ」など、一緒に遊ぶためには同質であることが条件になることが多く観察される。同じ道具や玩具などを手がかりに相手の遊びに参加し、遊びが展開し楽しさが共有され、それが土台になって「仲よし」の関係へと発展していくことを考えると、この年齢の子どもたちの結びつきは、同質の経験・道具・玩具などが重要な意味を持つという

ことは1994年に考察した通りである。

しかし、この「同質を求めて集まる」という傾向は、裏を返せば異質を区別（排除）するということになる。子ども同士の関係を発達的にみた場合、この同質の「わかりやすさ」「居心地のよさ」「安心感」を十分に経験することが異質を受け入れる（つまり、同じ道具でなくても）ことにつながるのではないかと考えられる。例えば、上述の4-（1）に上げた「相手の興味引く遊びを提示」するためには、たくさん遊び込んでいて、その楽しさや新しい発見をしたりする経験が土台になっていることが重要であった。こうしてそこに参加して、色々の道具を駆使して一つの遊びを補い合っ（協働）遊ぶことが、その次に展開されると考えられるからである。つまり、遊びの楽しさを追求すると、必然的に「異質を受け入れていく」とことになると考えられる。以上から考えられることは、逆説的ではあるが「保育者の手を離れて子ども同士で」ということを急ぐのではなく、保育者も一緒になって遊びの楽しさを追求することを十分にすることが、子どもたち同士での関係を発展させることになると考えられる。

#### IV. 今後のまとめと予定

保育者は「自発性」を「ひとりで」とか保育者がいなくても「子ども同士でなかよく」というように大人の手を離れることや好ましきとして捉える傾向にあることが理解できる。この視点からは、これまで考察してきた、子ども同士の関わりでの発達における3歳児期に重要な意味を持つ「他を区別（いれてーだめよなど）」する経験が正当に位置づけられないことになる。それは「だめよ」という拒否にあった時、それでもその遊びに引かれ参加しようと、これまでの経験を総動員してかけ合い、そこに参加していくという子ども自身で問題解決を図るという主体的な経験、さらに同質の遊び集団が異質を受け入れていくというこの時期の重要な経験が抜け落ちてしまいかねないからである。であるから、他の子の遊びへの参加においても、さらに遊びを発展させる（楽しさの追求ー充実した今の創造）ために異質を受け入れるようになるためにも、「子どもたち同士で」遊ぶようになることを急がずに、「保育者と一緒に遊ぶ」ことや「子どもが始めた、あるいは繰り返しの遊び」を十分に楽しみ、そしてより発展していけるように保育者が関わることに、この時期の自発性の姿をみたいと考える。

今後は自発性をめぐる問題として4・5歳児を検討する予定である。